鈴木（すずき）　利貞（としさだ）

心豊かな教育を目指した幼年会（ようねんかい）

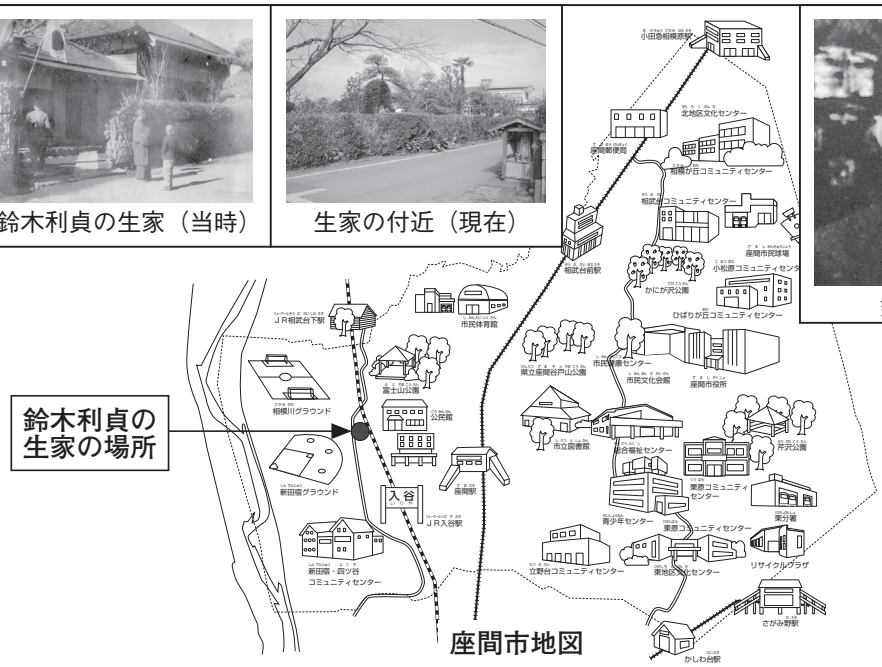
文
古川（ふるかわ）　修（おさむ）
倉田（くらた）　敦子（あつこ）
平野（ひらの）　綾子（あやこ）
藤沖（ふじおき）　亮（りょう）

絵
倉田（くらた）　篤子（あつこ）

鈴木利貞の生家（当時）

生家の付近（現在）

鈴木利貞



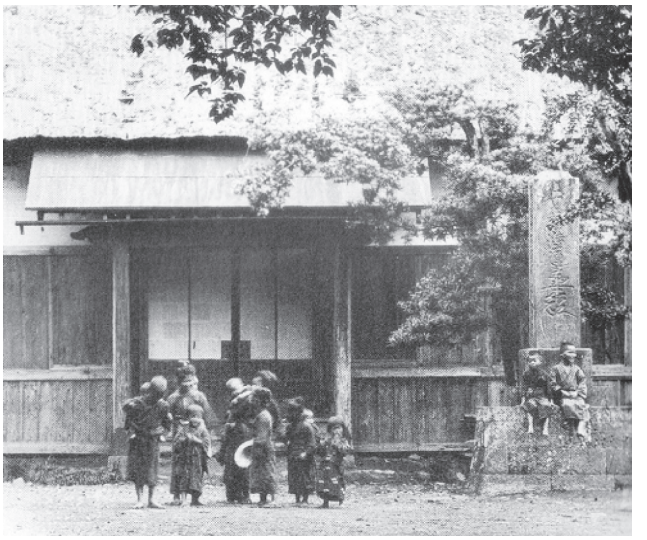
座間市地図

西暦	和暦	年齢	できごと	時代背景
一八八二年	明治十五年	0歳	十二月九日、河原宿（現在の座間二丁目）で生まれる。	
一八九七年	明治三十年	14歳	尋常高等座間小学校（現在の座間小学校）の高等科を卒業する。	一八九四年 日清戦争
			神奈川県尋常中学校（現在の県立希望ヶ丘高校）に編入する。	
一八九九年	明治三二年	16歳	病気が悪化し、中学校を中退する。	
一九〇一年	明治三四年	18歳	子どもたちに自宅で「夜のお話し会」を始める。	
一九〇二年	明治三五年	19歳	尋常高等座間小学校の先生となる。	
一九二三年	大正十二年	40歳	尋常高等座間小学校の先生をやめ、県立厚木中学校（現在の厚木高校）の先生になる。	一九〇四年 日露戦争 一九一四年 第一次世界大戦 一九二三年 関東大震災
一九二七年	昭和　二年	44歳	青年教育の功により、高松ミキと県知事表彰を受ける。	
一九三八年	昭和十三年	55歳	七月九日、亡くなる。	一九三九年 第二次世界大戦

【文・絵　作者紹介】

古川修・倉田敦子・平野綾子・藤沖亮は、座間市内小中学校に勤務する教員であり、市教育研究所の教育課題研究員会に所属していたときに、鈴木利貞に関する資料を調べ、今回の文章を執筆した。倉田篤子は、市内中学校に勤務する美術科の教員で、挿絵を担当した。

明治中頃の座間村では、ほとんどの家が農家で、米・麦などを作ったり蚕を育てたりする仕事をしていました。子どもたちも手伝いをして暮らしを支えていました。



当時の座間村の様子
円教寺境内で 幼児の子守をする子ども

農家のなかには、田や畑を借りている小作農家もありました。農家の仕事だけでは暮らしていけない家もあって、子どもたちは他の家の手伝いや遠くの町に住みこみで働きに行くため、学校に行けないこともありました。

江戸時代には、徳川幕府は全国的に村と村が互いに反目し合い、農民の力が結集しないように仕向けていました。その風潮は明治時代になっても根強く残り、若者や子どもたちは、なぜだかわからないまま、村の中でも他の集落の

蚕
カイコガの幼虫。桑の葉を食べ、繭を作る。その繭から生糸をとる。このころ座間では生糸の生産が盛んだった。

小作農家
地主から土地を借り、小作料を払ってその土地を自ら耕し、農業を営む農家。

者と会うと、けんかし、ののしりあうのでした。

こうした世の中のあり方に疑問を持ち、村の子どもたちを何とかして正しく導こうと考えていた青年のひとりが鈴木利貞でした。

本好きな利貞

利貞は、明治十五年（１８８２年）十二月九日、座間村の河原宿（現在の座間二丁目）で代々農業をしていた家の次男に生まれました。その家は小作農家の年貢によって生活する地主ではなくて、自ら働く自営農家でした。

子どものころの利貞は体が弱く、よく熱を出しました。長男が幼くして亡くなったせいもあって、大切に育てられました。六歳になって、座間中宿の不動尊の前にあった真誠小学校（座間小学校の前身）へ通うようになりましたが、途中でガキ大将にいじめられるのがこわ

27歳の利貞

ガキ大将　いたずらな子供たちのかしら。

いので、いつも家の誰かに門口で見送ってもらっていました。

利貞は、本を読むことが好きでした。それには、竹小父という、親戚ではないけれど利貞の家の手伝いをしてくれた人物の影響があります。この竹小父から、昔話や歴史の物語などを聞くことが、幼い利貞にとって大きな楽しみでした。そこから自然と広い世界に眼を向けるようになったのです。

「竹小父は、どうしてそんなに面白い話を知ってるの？」と尋ねると、

「それはたくさん本を読んだからさ」と答えたそうです。

そこで自分も竹小父のようになりたいと思ったのでしょう。当時は子ども向けの本がそれほどなかったので、利貞は大人向けの本を友だちや学校の先生に借りたり、交換したりして読んでいました。たとえば、十四歳で高等小学校を卒業する年までには、『伊勢物語』『徒然草』『三国志』などを読んでいました。

伊勢物語
平安時代の歌物語。

徒然草
鎌倉時代の随筆。作者は、兼好法師。

三国志
中国の魏・呉・蜀、三国の史書。

進学と挫折

明治三十年（１８９７年）、高等小学校を卒業することになった利貞は、この年にできた横浜の神奈川県尋常中学校（現在の県立希望ヶ丘高校）を受験したいと思いました。父親は利貞の身体が弱いことを心配して進学に反対していましたが、利貞の家に下宿していた小学校の諏訪先生と母親が父親を説得してくれました。諏訪先生は、新任として尋常高等座間小学校に赴任し、夜には利貞と一緒に机を並べて勉強していたので、利貞の熱心さを十分に理解していました。母親は、学問を大切にしてきた家の生まれで、利貞の進学を応援してくれました。利貞は期待に応えようと懸命に勉強し、村の仲間、四、五人とともに中学校二年生の編入試験を受けました。利貞は合格し二年生に編入しましたが、他の者は合格しなかったので、一年生に入学しました。他の者よりひとつ上の学年に編入したわけですから、なおさら猛烈な勉強が始まりました。

神奈川県尋常中学校
神奈川県内最初の中学校。利貞は開校した年に受験している。

受験に反対していた父親が、二年に編入するなら中学を受験してもよいと、利貞にとって厳しい条件をつけた。

下宿
よその家の部屋を借りて生活すること。

ところが、夏休みを終えて九月に入ると、教室へ出ても足がだるく、視力が弱って、黒板の数式が読めないため、代数の成績が下がったこともありました。夜、復習をしていてもまぶたが閉じてしまい、両方の親指と人差し指であけてやらなければ、文字を読むことができなくなりました。

ついには、十二月のはじめ、利貞は自ら自宅療養を願い出ました。帰郷して、あちこちの医師にかかりますが、病状は少しもよくなりません。日記には、病名が記されていませんが、今の病名だと脚気で、そのために視力が衰えていたようです。脚気がビタミンB1の欠乏によることが分かっていなかった当時、適当な治療法がなかったようです。利貞は、三か月の間、自宅で療養しましたが、一向に体調が回復しなかったため、退学を決意しました。

幼年会の始まりは夜のお話し会

中学校を中退した利貞は、昼間は体に気を付けながら、農作業や家の手伝

脚気
ビタミンB1の欠乏によって、心不全と末梢神経障害をきたす病気。

いをしていました。利貞は親友たちと話し合い、「この村の現状を変えていくためには、時間がかかっても小さな子どもたちを教育して、村のためになる思いやりを持った人に育てていくことが大切である。君たちは進学して村を出て行ってしまう。村に残るのは自分だけである。残った自分が子どもたちを立派に育ててみせる」と、思いを日記に残しています。

当時※、子どもたちは農業の手伝いをして、学校に行くことができないほど忙しく働いていました。利貞は子どもたちに時間的余裕がある農閑期の土曜の夜、自分の家で「夜のお話し会」を始めました。利貞は自分がかつて幼い頃、近所の竹小父にしてもらったように、楽しみの少ない村の子どもたちにおも

※当時の座間小学校の就学率（学校に通う子どもの割合）は、80％ほどであった。

農閑期
農作業のひまな時。

しろい話をしたり、本を読んで聞かせたりしたのです。その話し方は、聞いている子どもたちが物語の中に引き込まれてしまうような魅力的なものでした。そして利貞は話の中で、子どもたちにいじめや差別のない理想の社会を説きました。

「としちゃんの話は何度聞いてもおもしろい」

「もう一つ、もう一つ」

とねだられ、利貞は、

「話してあげる代わりにもうけんかをするな」

と話しました。この「夜のお話し会」が大きな反響を呼び、近くの子どもたちだけでなく、広く座間村全域からも、多くの子どもたちが集まってくるようになりました。

子どもたちはこの集まりのことを「幼年会」と呼ぶようになりました。

としちゃん
当時、お話を聞きに集まった子どもたちは、ずっと年上の利貞をこう呼んでいた。

子どもたちの約束　柿の木の下の誓い

みんなが仲良くすることの大切さを教わった子どもたちは、柿の木の下で太鼓をたたいて遊びながら、次のような約束を決めました。

それを、「柿の木の下の誓い」といいます。

「柿の木の下の誓い」

これから皆して仲よくして、家の方で遊ぶ時にも、学校で先生の言はれる通りにしよう。

先づ大きい者は小さい者を大切にして可愛がる事。

小さい者は大きい者の言ふことを聞く事。

けんかや、悪いたづらをしない事。悪口を言はぬ事。

柿の木の下で遊びながら自分たちで約束を決めました。

柿の木の下の誓い
幼年会の会報『さざれ石』第一号（昭和十二年発行）から抜粋。
この誓いは日頃、利貞が言い聞かせていた内容である。
この誓いをもとに幼年会の会則として『六つの願い』が成文化された。
柿の木の下の誓いという名前は『三国志演義』の中で主人公たちが桃の木の下で兄弟の誓いを立てた『桃園の誓い』をまねたものと思われる。

六つの願い
一　意地悪き事をせざる事。
二　他人に対して悪口をいわざる事。

これが、「座間っ子八つの誓い」の元になっています。

火事にも負けず、広がる幼年会

しかし明治三十四年（１９０１年）二月の風が強い日、隣の新田宿で火災が起こりました。それが利貞の住む河原宿にも飛び火して、利貞の家でも建物や家財道具だけではなく、利貞が買い集めた本や友だちから借りていた大切な本もほとんど燃えてしまいました。会場である家が焼失したことにより、幼年会の集まりは中断してしまいました。これは利貞だけでなく、子どもたちにとっても大事件でした。

「柿の木の下の誓い」を作った子どもたちが成長したときの記念撮影

三　喧嘩せざる事。
四　学校にて教えを受けたる事は、郷党※の間においても必ず守るべき事。
五　年少者は年長者を敬うべき事。
六　年長者は年少者をいたわりいつくしむべき事。

※郷党とは、村里のこと。

ところが、「利貞さんが自分の家でお話し会をできないのなら、ぜひこちらに来て話して欲しい」と、近い地区からも離れた地区からも招かれて、話をしに出かけていくようになりました。これによって遠くの地区で、今まで利貞の家まで来ることのできなかった小さな子も含めて、さらに多くの子どもたちがお話し会に参加するようになりました。火事のために、かえって幼年会の活動と利貞の考えは村中（むらじゅう）に広がっていくことになりました。

利貞、教育者の道へ

利貞は、進路について悩（なや）んでいました。そんな時、母方の叔父が訪ねてきて、体が弱い利貞は農業より教員に向いているのではないか、とすすめました。利貞は、それでもしばらく悩み続けていましたが、ある日、父からも、教員になることをすすめられました。そこで利貞は、「農業をするより教育者になる方が自分の力を発揮（はっき）できるのではないか。また、その方が我が家のため

になるのではないか。その上、自分の好きな学問もできる」と考えるようになりました。

明治三十五年（１９０２年）、利貞は、悩みぬいた末、教育者への道を決意し、友人に相談し、自分の希望を、当時の尋常高等座間小学校の校長先生に伝えてもらいました。校長先生は、以前から利貞の幼年会活動を高く評価していて、利貞ならば子どもたちに深い愛情を注ぐ立派な先生になれると考え、利貞を尋常高等座間小学校の先生にしました。利貞、十九歳の時でした。

利貞は、「子どもたちこそが、将来、理想の座間村を創（つく）る人材だ」という信念のもと、教え方を工夫し、子どもたちに授業や幼年会活動を通して自分の考えを伝え、みんなが助け合って暮らそうとする心を育てました。

自分たちのことは自分たちの手で

やがて、利貞の話を聞くだけでなく、自分の経験を話したり、おもしろい

話やためになる話をしたりする子どもが出てきました。夜のお話し会では、子どもどうしが自分たちの考えを自分たちの言葉で伝え合いました。

夜のお話し会で、本を読むことの楽しさを知った子どもたちは、はじめは利貞から本を借りて読んでいましたが、自分たちも本を買いたいと思うようになりました。

しかし、本はとても高価で親が買ってくれることはありませんでした。そこで、みんなで会費を集めて共同の本を購入（こうにゅう）し、回覧（かいらん）して楽しみました。さらに、自分たちの活動に必要なお金は、自分たちで作ろうと考え、み

下宿幼年会の縄ないと麻糸つなぎの作業

んなで協力して働こうと話し合いました。

幼年会では厚木の鳶尾山に遠足に行くことも楽しみの一つでした。この遠足で相模川を渡る渡し舟の料金も自分たちで稼ぎ、お金がなくてもみんなで遠足に行くようにしました。

資金を集めるため、水田耕作をはじめ、縄ない、麻糸つなぎ、新聞配達などの活動を協力して行い、作った縄や麻糸も売りました。こうした活動は子どもたちの楽しみでもありましたが、社会や経済の勉強にもなり、地域の大人たちもやさしく助けてくれました。

資金を得るだけでなく「自分たちの村は自分たちで良くしていこう」という利貞の願いを実現しようとして、村の中心を通る道にカンを置き、これに下駄の鼻緒が切れたとき修理できる道具と鼻緒にする布、雪の日に下駄についた雪をかき取るための棒など、子どもたちが、こんなものがあると村の人の役に立つのではないかと考えたものを入れておきました。

鳶尾山
厚木市から愛川町にかけて続く低い丘陵地帯にある山。

縄ない
わらを手のひらでねじって縄を作ること。

麻糸つなぎ
植物の麻からとった繊維をつないで糸を作る作業。

その頃、隣近所の子どもたちが誘い合わせて登校する、という形で自然に集団登校が始まりました。年長者が年少者をいたわるという幼年会の教えが身についていた子どもたちは、自然に「上級生は下級生のめんどうをみよう」「下級生は上級生の指示にしたがい、けんかなどをしないようにしよう」と話し合いました。

利貞は、四ッ谷の女子が自分たちで作成し実践していた「通学心得」に着目しました。

通学心得

（1）言葉遣いに気をつける

（2）無駄遣いをしない

（3）登下校時には学校の出来事を話し、みんなで学校で習った歌を歌うこと

（4）雨や雪の日等に下駄の鼻緒が切れないように日頃から気をつけること

（5）暴風や雷の時、上級生が指図するまで学校に控えていること

（6）学校では、先生の教えに従い、家では父母や年上の者の言葉に従うこと

この通学心得は、村内全域にも広まり、やがて各地域にリーダーが育っていきました。

そこで、利貞や座間小学校の先生たちは、明治四十一年（1908年）、子どもたちの自治を育てる「組長制度」をつくりました。組長制度は、教師の指導とは別に、学級の組長や通学班の組長がリーダーシップを発揮して、児童生徒を指導していく体制のことです。

自治
自分たちのことを自身で処理し、治めること。

先生も驚くすばらしい活動

座間村全域に十一の幼年会ができました。大正九年（1920年）、その中の一つ、皆原幼年会の会合に出席した一人の先生の日記に、当時の幼年会会員である子どもたちの様子がよく表れています。

組長から「今晩談話会を開きますから幼年倶楽部へおいで下さい」と申し出があった。行ってみると、五～六十人の子どもが唱歌などを歌っていたが、女の組長の声で静かになった。まず出迎えたのは上級の女生徒たちで、帽子や外套、履物の世話など大人の大切な客を迎えるのと同じようである。男子の組長は席を立って座に招じ、男女ともに「先生、今晩はまことにご苦労様でございます」と挨拶がありその間に女の子が手あぶり火鉢を出す。茶菓を運んで先生をもてなす。男子の組長へも「みなさんもどうぞ」とお茶をすすめ、菓子をはさむ。やがて男子の組長が「先

幼年倶楽部
人々が団体を作って社会的な活動を行うには、そのための場所が必要になる。幼年倶楽部はそのための施設である。

外套
防寒のため服の上に着る衣類コート。

手あぶり火鉢
部屋全体ではなく、手だけを温めるための小さな火鉢。

菓子をはさむ
菓子をていねいに「はし」ではさみ、さしだす。

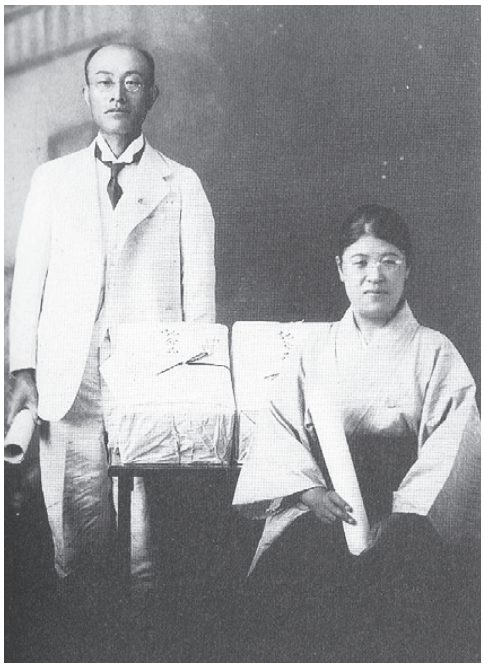
生、私たちが組長になってから、これといった事業もせずに卒業してしまいますが、何か私たちでできる仕事はないでしょうか」と言い、さらに「これが幼年会の記録で、これが基本財産の通帳です。他に今年度（大正九年）に作ったお金が五円あります。これで何か役に立つ仕事はできないでしょうか」と言う。組長は残って「何か役に立つ仕事」について話し合う。あまりに行き届きすぎているので「どうして作ったお金ですか」と聞く。「みんなで縄をなったり麻糸つなぎをして作りました」と言う。先ほどから少なからず感じ入っていた先生は、感想を述べ、「後はみんなで談話会をしなさい」とだけ言った。小さい子どもから次々に出てきて恥ずかしがらずに歌ったり、おとぎ話をしたりする。ひと通り終わって散会すると、小さい子を先頭に何の混乱もなく整然と帰っていく。

基本財産
ここでは子どもたちが働いて稼いだ、幼年会が持つ財産。

五円
現在のお金に換算すると数千円～一万円ほど。

利貞の後半生

大正十二年（１９２３年）、関東大震災の影響で中学校の教員が不足したため、利貞は推薦（すいせん）されて、大正十三年に神奈川県立厚木中学校（現在の県立厚木高校）に勤（つと）めることになりました。勤務（きんむ）先は変わっても利貞は幼年会を支援し続けました。利貞が去った後の座間尋常高等小学校には、利貞の県立厚木中学校での教え子が赴任し、幼年会の機関誌を発行させるなど、幼年会活動をさらに活発化させました。



昭和２年（1927年）
県知事表彰を受けた鈴木利貞と高松ミキ

昭和二年（１９２７年）、利貞は青少年教育功労者として、高松ミキとともに県知事表彰（ひょうしょう）を受けました。

昭和十三年（１９３８年）、利貞は勤めていた県立厚木中学校

高松ミキ
利貞の教え子。
幼年会出身で、座間女子青年会の指導者。

で気分が悪くなって早退しましたが、その帰り道に倒れ、帰らぬ人となりました。五十五歳でした。葬儀の際、参列者は宗仲寺から利貞の家まで続くほどの人数でした。実に、多くの人々に慕われていたことの表れです。

今も受け継がれる利貞のおもい

その後、利貞とともに幼年会を育ててきた教師の多くが異動で座間小学校を去り、さらにすべてが戦争へと動員されていく中、幼年会を支えてきた青年たちも出征するなど、幼年会の活動は急速に衰え、ついに終わりを迎えました。しかし幼年会を通して学んだ人たちが大人になり、利貞が思い描いていた理想を受け継いでいきました。

戦時中、座間町は、近隣の町や村と合併して相模原町の一部になっていましたが、戦後、自分たちの町は自分たちでやっていこうという気運が高まり、昭和二十三年（１９４８年）に座間町として独立することになりました。こ

宗仲寺
現在の座間市座間一丁目にある寺院。

出征
兵士になり、軍隊に加わって戦地に行くこと。

れが現在の座間市の前身です。その運動にも幼年会の精神の影響が少なくありません。

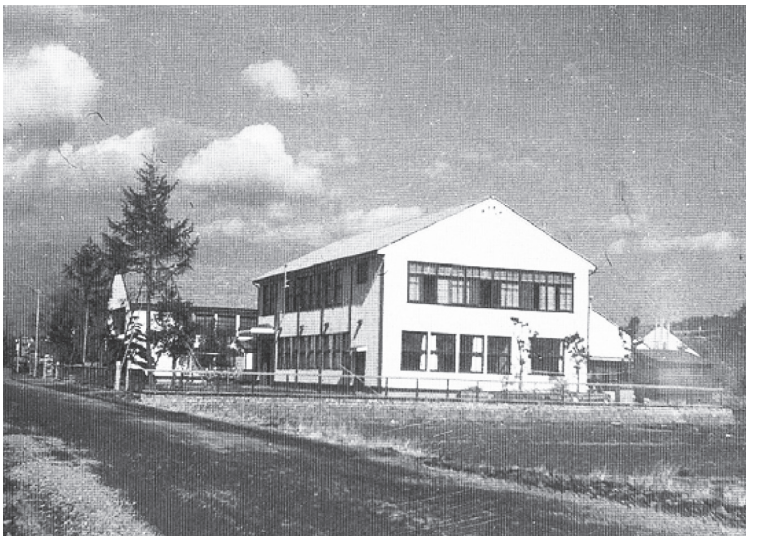
戦後になって文部省から全国に公民館をつくることが発表された時、公民館とはどういうものかわからない人が多かった中で、幼年会出身の人々は「幼年倶楽部の大きいものを作ればいいのですね」と共通のイメージを持つことができました。そして町にはたらきかけ、男女、家業などさまざまな立場から仕事を分担(ぶんたん)し、昭和二十九年（１９５４年）に神奈

河原宿幼年会の幼年倶楽部　右端に収穫した米の俵がある

幼年倶楽部
22ページを参照。

川県内で初のすばらしい公民館を建設することができました。町の地域ごとに子ども会が結成されたとき、その指導者の多くは幼年会出身者で、幼年会のよき伝統を生かしながら活動を行いました。

また、谷戸山（やとやま）の土地が売られて森がなくなってしまうかもしれなくなったとき、自然や歴史を子孫（しそん）に残すために公園にしようとはたらきかけた人たちの中心にも、幼年会出身者がいました。彼らは利貞とともにこの地を歩き、水やその水源を育（はぐく）む森の大切さ、そこに伝わる歴史の意味などを教えられていたのです。そのおかげで谷戸山の森や泉、昔のままの道などは県立座間谷戸山公園として残され、市民の憩（いこ）いの場となりました。



完成したばかりの座間町公民館

座間町公民館
当時、座間二八八〇に建てられたが、平成八年十一月に入谷一―三〇九七に新館が建てられ、移設した。

谷戸山
座間市立図書館西方にある谷と、その周辺の森林。谷戸とは、台地に入り込んだ谷のことを言う。

自分たちの手で地域をよくしていこう、地域のために役に立とうという利貞の思いや願いは、教育尊重（そんちょう）の町の精神的支柱として、明治から大正、昭和、そして平成へと、わたしたちに受け継がれてきました。今の子どもたちが我が郷土「座間」に誇（ほこ）りを持ち、この高い志をさらに将来（しょうらい）に伝えていってほしいと願います。

県立座間谷戸山公園　田んぼ

水鳥の池

【参考・引用文献】

鈴木英夫（1982）「細谷川　座間村幼年会と鈴木利貞」　丸井図書出版株式会社
大谷之彦（2008）座間教育史資料第九集「鈴木利貞日記『我が身の歴史抄　その一』」座間市教育委員会
語り伝え聴き取り調査団・市史編さん係（1981）「座間の語り伝え＝産育・婚姻編＝」座間市
語り伝え聴き取り調査団・市史編さん係（1984）「座間の語り伝え＝村制編2・村のしくみ＝」座間市
教育史研究員会（2006）研究紀要第25集「鈴木利貞と座間幼年会」座間市教育委員会
小学校社会科教育研究員会（2011）研究紀要第30集「子どもたちの手でつくりあげた幼年会」座間市教育委員会
教育研究員（2012）新版「わたしたちの座間」座間市教育委員会

鈴木利貞に関する写真については、座間市教育委員会が所蔵してるものを引用・活用しています。
※この文を作成するにあたり、座間市教育研究所教育史編集員の大谷之彦様にご協力いただきましたことに感謝いたします。